

【平成30年度 校内研究のまとめ】

◇研究主題◇

主体的に考える児童の育成

～国語科における協働的な学習を通して～

1 研究内容について

(1) 児童が主体的に考えるための各学年の取組み

	1 回目	2 回目
	1 年	
提案した手だて	①ワークシートの活用 ②相互交流させるための活動の工夫	①大事な言葉を取り上げる ②相互交流させるための活動の工夫
効果	①友達の発表を聞いて、自分と登場人物を重ねて気持ちを書くことができた。 ②ペア学習では、発表が苦手な児童も発表することができた。全体発表では、いいなと思ったことや自分では気付かなかったことを書き足すことができた。	①大事な言葉から、友達の発表を聞いて様子を想像することができた。 ②友達の考えを聞いて自分では気付かなかった点について考えを深め、付け足したいことをワークシートに書き加え修正していた。
反省点	行動の背景を深く読み取ることが弱かった。	想像したことが「うれしい」とまとめている児童が見られたので、もう一步登場人物の立場に思いを寄せて想像させる工夫が課題として残った。
	2 年	
提案した手だて	・ポイントとなる言葉の意識化 ・板書とワークシートによる読みの整理	読みを深めるための音読の工夫
効果	読み取ったことをポイントとなる言葉を軸にして板書した。板書で級友の発表を整理することにより、苦手な児童も確実な読み取りにつながった。ワークシートは板書と同じ様式にしたことによりどの児童も確認しながら記入できた。	生活経験を想起したり実物大の物を見たりしながら読みとったことを表現するに当たり、役割分担したことで劇のような意識が持てた。それによって、会話文だけでなく地の文を読む際にも、声のトーンを変えたり動作を入れたりして音読できた。
反省点	発展的な内容について自分の考えをまとめることができないまま話し合うことになり、ペアでの意見交換であまり有効な話し合いにならなかった。	時間の関係で音読発表をするグループの数が限られ、児童相互の評価をする時間が確保できなかった。
	3 年	
提案した手だて	見つけたしかけを全体で共有する場面における、教材文を拡大したものを活用した協働的に学ぶ学習活動の設定	各単位時間で読み取ったことを、1枚に整理したワークシートの活用
効果	黒板の拡大文にマグネットを貼る際にお互いに根拠を聞き合う姿が見られた。「児童の知りたい気持ち」を基に全体の共有を進めることで、抽象的な思考が苦手な児童も意欲的に考え発表する姿が見られた。	1枚のワークシートに比べる本文と学習してきた成果がまとめられていることで、二つの文章の説明の仕方や筆者のねらいの違いを容易に比較できるようになった。
反省点	数多く出た考えを焦点化することができずに、時間が足りなくなった。意見交流のさせ方が課題となった。	学習課題が曖昧になってしまったために、整理された情報を生かし切れない児童がいた。

	4 年	
提案した手だて	主人公の気持ちの変化を心情曲線に表し、ペアで交流して互いの考えを伝え合い深め合う授業	物語の最後の一文に着目し、戦争によって破壊されたものと残ったものについて考え、3人で話し合う授業
効果	・前時までに学習した3枚のワークシートを手掛かりにして、のぶよの気持ちの変化を1枚のワークシートにまとめた。児童は、これまでの学習を基に気持ちの変化とその根拠を考え、心情曲線に表した。 ・ペア学習で互いの考えを伝え合う活動を取り入れた。児童は、心情曲線を書いたワークシートを示しながら、気持ちが変わったきっかけやその理由を話し合うことができた。	・発問を二つに絞り、じっくり考えて自分の考えをまとめる時間を保障した。児童は戦争があっても残ったものを想像してまとめることができた。 ・場面の様子やヤモの気持ちについて読み取ったことを模造紙で掲示した。児童はそれを手掛かりにして考えることができた。 ・3人グループで話し合う活動を取り入れた。児童は互いに自分の考えとその根拠を発表していた。
反省点	前時までの読み取りと本時における読み取りで焦点化してねらいに迫るという点において発問が曖昧になってしまった。前時との違いをはっきりさせて分かりやすい発問を工夫する必要があった。	3人グループで話し合ったが、グループによっては内容があまり深まらないところがあった。グループ編成を配慮したり、グループを替えて複数回話し合いを行ったりするなどの工夫が必要だった。
	5 年	
提案した手だて	共通の課題記事の提示	個人で根拠を整理し短い言葉で表すために、「フィッシュボーン図」を使用した
効果	・共通の記事について見出しの工夫やよさを見つける活動だったので、児童も相互評価しやすい様子だった。 ・相互評価の際に、相手の見出しのよい点に目を向けさせたことが主体的に考えようとする意欲に結びついた様子だった。	・心に残った出来事や言葉を抜き出す場面を個々に選択させたことで、より主体的な読みにつながった様子だった。 ・少人数での活動後に自分のワークシートに赤鉛筆で付け足したり書き直したりする児童が5名ほどいた。
反省点	・一つ目の記事については全体で見出しを考えさせ、よさや工夫について発表し合い、二つ目は個人で考え、ペア学習、全体での共有化という流れも考えられた。 ・全体で共有する方法や時間配分。	・図の使い方に十分に慣れていないこともあり、ノートにまとめたことや教科書に線引きした箇所から出来事や言葉を取り出して書き込むやり方に戸惑う様子が見られた。
	6 年	
提案した手だて	筆者の主張と事例のつながりを読み取り、自分の身の回りの具体的な事例と関連させながら筆者の主張に対する自分の考えを持つ授業（発問・ペア学習）	3人のプロフェッショナルたちを挙げた筆者の意図を考えながら、筆者の主張を読み取る授業（発問・ペア学習）
効果	・教材文を1枚で示し、二つの事例を比較しやすくした上で書かれ方の違いに気付かせ、筆者の意図を読み取らせる発問をした。児童は事例と主張のつながりに気付き、主張をより深く読み取っていた。 ・ペア学習を2回、異なるペアで設定したことにより、自分の考えを捉え直したり、考えを広めたりしていた。	・ベン図を用い、3人の共通点を考えさせる発問をしたことにより、多くの児童が筆者の主張を自分の言葉でまとめることができていた。 ・1回目と同様にペア学習を2回、異なるペアで設定したことにより、自分の考えを文章を根拠に説明する姿が見られ、自分の考えを捉え直すことにつながっていた。
反省点	教師から発問を投げ掛ける展開になったので、児童の気づきから中心発問につながっていくことで、児童の主体的な活動になっていったのではないかと考えた。	自分の考えを友達に伝える際に、根拠を示さずに伝える児童がいたため、なぜ自分がそう考えたかを伝えることを大切にペア学習を行えると良かった。

(2) 今年度の研究授業から見られた児童の変容 ～ 研究の反省より

- ・友達の発表を聞いて、自分と登場人物を重ねて気持ちを書くことができるようになった。
- ・友達の考えを聞いて、自分では気付かなかった点について考えを深め、付け足したいことをワークシートに書くことができるようになった。
- ・級友の話をよく聞き、自分の考えと比較したり参考にしたりする学習態度が身に付いた。いろいろな考えがあることや、それぞれの児童の良さに気付く機会にできた。
- ・少人数で話し合うときに、建設的な意見を積極的に発表する児童が多くなった。
- ・自分の考えを持つ際に、筆者の言葉をなぞるだけではなく、自分の立場から具体例を挙げ、自分の言葉でまとめることができる児童が多くなった。考えを形成していく方法の一つとして自分ごととして捉えて読む読み方を習得できたためと考える。
- ・ペア学習で、自分の考えを根拠を示しながら伝えたり、友達との相違点に気付き自分の考えとして取り入れられたりする児童が多くなった。
- ・ペア学習やグループ学習において、始めのうちは自分の考えを発表することと友達の発表を聞くことで精一杯だったが、繰り返し行ってきたところ、友達の考えに対して質問したり感想を述べたりすることができるようになった。また、互いの共通点や相違点について話し合い、それを手掛かりにしてさらに考えを膨らませることができるようになってきた。

2 成果と課題

(1) 成果

昨年度より研究の教科を国語科に絞り研究の方向性をより具体的に示し、授業研究を行ってきた。昨年度の反省として「協働的な学習」を目指して授業づくりが行われたが、国語科のねらいを十分に達成できない場合があったことが挙げられていた。そのため、今年度は、国語科のねらいを達成することを第一に考え、そのねらいに向かって児童が主体的に考える授業を目指すことを共通理解して授業づくりを行ってきた。その研究の成果は、下の表にまとめたように主に二点挙げられる。一点目は国語科における児童が主体的に考える姿を明確に示した点である。二点目は国語科のねらいに基づいた授業づくりを目指し研究主題に迫ることができた点である。

学年	①各研究授業における主体的に考える児童の姿	②国語科のねらいを踏まえた授業づくり	
		(a) その姿を実現するための手だて	(b) 協働的な学習
1年	登場人物の行動や会話に着目して、そのときの様子や気持ちを想像しそれを友達に伝えようとする姿	考えることを精選し、登場人物に吹き出しをつけたワークシート	ペアでの発表
2年	登場人物の様子から気持ちを想像し、音読に生かそうとする姿	読みを深めるための音読の工夫	全体での読み取り→3人グループでの音読
3年	二つの保健だよりを読み、読み手としての感じ方を考え、違いや共通点を伝え合う姿	各単位時間で読み取ったことを、1枚に整理したワークシートの活用	3人組での話し合いをグループの構成員を変えて2回
4年	戦争で破壊されたものと残ったものについて、叙述や挿絵を根拠にして考える姿	物語の最後の一文に着目し、戦争によって破壊されたものと残ったものについて考える発問	少人数での話し合い
5年	伝記を自分の考えと比較しながら読み進め、感じ方の違いや共通点を伝え合う姿	個人で根拠を整理し短い言葉で表すための「フィッシュボーン図」の活用	小グループでの話し合いと自由交流
6年	自分で教科書の叙述に戻りながら、考えの根拠を述べる姿	読み取りシートのベン図を用い、3人の共通点を考えさせた発問	ペアを変えて2回話し合う

① 国語科における児童主体的に考える姿の明確化

今年度より、各学年の指導案の中で、主体的に考える姿を明記した。国語科のねらいを達成することを共通理解して研究を進めた結果、どの授業でも指導事項を踏まえて児童の姿が提案された。例えば、

5年生は「伝記を自分の考えと比較しながら読み進め、感じ方の違いや共通点を伝え合う姿」である。研究主題に対する各授業における児童の姿を具現化し示すことができた。

② 国語科のめあてを踏まえた授業づくり

昨年度、今年度と指導主事や授業アドバイザーに指導をいただきながら、国語科の授業づくりと指導事項の関係について研究を深めてきた。それに伴い、各研究授業における手だてや協働的な学習が国語科のねらいを達成することに焦点化された。考えること・学び合うことありきではなく、国語科のねらいを達成することに向かって主体的に考えることを目指した授業づくりが行うことができた。

(a) 児童が国語科のめあてに向かって主体的に考えるための手だて

昨年度までは、児童の思考をより児童の立場で教師が考えられるように模擬授業の後に指導案が配布され、授業案が検討された。今年度からは、授業のねらいに対する手だての効果を検討事項として焦点化するために、模擬授業を授業のめあてを十分に共有した上で進めた。発問や根拠の持たせ方、ワークシートの構成などが話し合われた。児童が各授業のねらいに向かって主体的に考えていくための手だてと考える内容と指導事項の関連を事前に十分に検討して授業づくりを行うことができた。その結果として、

各学年から提案された児童が主体的に考えるための手だては、その時間の指導事項に結びつくものになっていた。例えば、6年生では、教材文を一目で見渡せるシートを活用した上でキーワードをベン図に整理することで考える根拠を明確にし、どの児童でも自分自身と教材文を結び付けて考えるように工夫していた。また、4年生の授業では問いを工夫することで児童が考えたいという思いを持つだけでなく、想像を膨らませる根拠が、単元を通じて学習してきたことになるように吟味されていた。

(b) 協働的な学習の効果的な活用

今年度は協働的な学習においても、国語科のねらいに迫ることがより意識されるようになった。「何を」「どのように」学び合えば、その単位時間の指導事項を身に付けることができるのかということを児童の実態や教材の特性を踏まえて具体的に検討し、授業づくりを行うことができた。例えば、2年生の授業では、それぞれが読み取ったことを伝え合いながら、音読をグループで工夫する活動を取り入れた。協働的な学習として取り入れられたグループでの音読では、音読を工夫する過程で、登場人物の様子や心情について自分たちが考えたことを話し合っており、より深く教材を読み取ることができていた。このように、どの学年の授業でも学び合うこと自体が目的化されずに、授業のねらいを達成するために協働的な学習が取り入れられていた。

また、様々な学習形態での協働的な学習が提案された。例えば、3年生の授業では、保健だよりの読者として感じ取ったことを三人組で複数回交流する活動を設定していた。それにより、友達との感じ方の共通点について考えさせ、文章の与える印象とその根拠について理解を深めることができていた。各学年の授業において、複数のペアとの意見交流、複数のパターンでのグループ編成、一定時間の中で自由に相手を変えた意見交流など児童の実態や授業のめあてに合った協働的な学習が展開された。その中で、改めて課題に対して考え直したり、自分の考えを深めたりする様子が見られた。1年生の授業ではペア交流の後にワークシートに新たに気付いたことを書く時間を確保されていたように、学び合ったことを書くことが各学年の授業で取り入れられ、自分の学びをより確かなものにする手だてとして有効だった。

以上のことから、本年度の研究は、目指す児童の姿がより具体的に共通理解し、それを実現する授業の検証を積み重ねたことで、研究主題に迫ることができたものとする。

（２）課題

①授業時間のマネジメントと焦点化

今年度の各学年の反省の中で、共有化する場面に十分に時間が割けなかったり、授業時間が４５分に収まらなかったりしたことが挙げられていた。国語科のめあてを意識しつつ、協働的な学習も取り入れたため、一単位時間の中に納まりきらない学習活動を設定したことが原因と考える。「何を」「どのように」考えさせるのか、児童が考えたことをどのように取り上げねらいに迫っていくのかを検討していくことで、一単位時間の中で必要な学習活動が国語のねらいにそって焦点化され精選されていくと考える。

②単元を通じて主体的に考える姿を育む

今年度は一単位時間における国語科のねらいに向かって児童が主体的に考える姿を研究授業の中で実現することができた。また、授業の中で単元を学び終えた後の児童の姿を具体的に提案している授業があった。次年度は、より研究の質を高め、普段の授業に研究の成果を還元するために、一単位時間のめあてを達成するだけでなく、単元全体のゴールを具体的に共有しながら授業づくりを行っていきたい。